

第2回中央区教育振興基本計画検討委員会でいただいた意見・質問票に対する回答

●質問

	内容	事務局回答
1	<p>学年が上がるにつれ1日2時間以上勉強する子どもの割合は増加しており、23時以降に寝る子どもも増加している。一方、毎日運動する子どもの割合は低下している。1番の悩み事についても、受験前の学年では勉強と答えた割合が高い。長期欠席者の割合では病気が37%を占めており、国の平均より高い。これらのことから、中学受験の影響が考えられるが、その分析はしているか？中学受験の影響があるならば、行政、学校、保護者間で共通認識を持ち、改善に取り組む必要があると思う。</p>	<p>中学受験をする児童としない児童に分けた分析は行っていません。また、受験と病気の割合との関連性については、正確な分析はできるものではありません。受験する児童においては、勉強時間の増加、睡眠時間や運動時間の減少などの影響や勉強への悩みが大きくなることは想定されます。考え方としては、受験をするしないに関わらず、生活習慣の乱れは様々なところで悪影響を及ぼすものですので、今後も規則正しい生活習慣の定着に向けて、学校側からの指導、家庭(保護者)との連携を継続していきます。</p>
2	<p>①「毎日家で勉強する」と回答した割合は、高校受験を控えた中学3年生でも34.4%で、各学年とも参加校平均を下回っている。また、学校での勉強について、「全部理解している」「大変だけど理解している」の割合が、中学1年生では75.5%と高い割合であったが、中学2・3年生になると5%前後まで低下する。学習時間と理解度との関係はどのように解釈すれば良いか。</p> <p>②私立中学校になじめず区立中学校に転入してくるケースが一定数あるとのことだが、転入理由の傾向について把握しているか？また、こういった子ども達の学習態度、習慣、理解度の傾向についてはどうか。</p>	<p>①家で勉強する割合が低い原因は、塾に通っている生徒が多いためではないかと考えています。理解度の低下(中1→中2・3)は、本アンケートが4月に実施されていることから、中1は小学校の学習内容について回答しているもので、理解度が高い結果となっています。中学校では勉強の難易度が高くなり、理解できない生徒が増加したものと思われ、参加校の傾向と同様となっています。塾を含む勉強時間をみると、中央区は参加校と比較して決して少なくありません。ただし、学校の授業以外に全く勉強をしない生徒や勉強を分からないままにする生徒については、授業で理解させる工夫と家庭における勉強の習慣づけが課題であると認識しています。</p> <p>②私立中学校からの転入者については、手続きの際に面談を行い、ご事情等をお伺いしながら対応していますが、主な理由是不登校などとなっています。転入後も、学校に馴染めているか等の確認を行うため、指導主事による学校訪問等もしていますが、転入生徒の学習態度、習慣、理解度の傾向については不明です。</p>
3	<p>①小・中学校とも不登校の要因で最も多いのは「不安の傾向」となっているが、その原因は？この主な要因である「不安の傾向」への対策が必要であると考え。</p> <p>②要因別の「該当なし」のうち、小学生では「精神的不安定」「体調不良」による登校不安「生活の乱れ」があるが、質問1で示した就寝時間が遅いことや勉強の悩みが引き金になっている可能性もあると思うが、原因は分析しているか？</p> <p>③要因別の「該当なし」のうち、中学生では「意図的な拒否」「怠学」「集団不適応等」となっているが、それぞれの原因は？</p>	<p>別表「不登校の要因」(平成29・30年度)のクロス表参照</p> <p>「精神的不安定」「意図的な拒否」等、外形的状況は把握できますが原因を特定するのは困難です。不登校の要因やきっかけは多岐に渡っており、一人一人異なるため、各学校現場では本人や保護者から丁寧に聞き取るなど、原因を確認し対応しているところです。</p>

●質問

	内容	事務局回答
4	<p>中学生のアンケート結果で、「朝食を毎日食べる」と回答した割合が中学2・3年生になると67%台に低下しており、参加校平均を下回っている。また就寝時間も「23時までに寝る」と回答した割合は中学2年生では65.4%、3年生では43.7%と低い。就寝時間が遅くなることは睡眠時間が不足している可能性が高いと思われる、このことが朝食を食べない割合を高めているのではないかと推察する。このような中学生の生活習慣の乱れについて分析しているか？生活習慣は学習態度や理解度にも影響があるように思う。学力や不登校の問題にも大きく影響を及ぼすものと推察され、家庭の役割について保護者への啓発等、取組を検討する必要があると思われる。</p>	<p>中学生の生活習慣の乱れについては、ゲームやスマートフォン、受験等に伴う勉強時間の増など様々な要因が考えられます。 ご意見にあるとおり、文科省のホームページ等でも生活習慣の乱れが集中力低下や朝食欠食の要因となるなど、子ども達に様々な悪影響を及ぼすことが言及されています。 規則正しい生活習慣は自然と身に付くものではなく、親子関係が密接な幼児期に家庭において子どもに規則正しい起床・睡眠リズムや正しい食習慣を身に付けさせるとともに、学童期以降に生活習慣の大切さを理解させることなどを通じて、自分の力で正しい生活習慣を維持できるように導いていくことが重要と考えています。 今後も規則正しい生活習慣の定着に向けて、学校側からの指導、家庭(保護者)との連携を継続していきます。</p>
5	<p>①「全国的にレベルは高いが中学生の理科、社会については学習力サポートテストの参加校平均を下回っている」ということが課題であると思う。設問ごとの正答率は把握しているか？また、正答率の低い問題はどのようなものか？なぜ正答率が低いのか、もしくは高いのか分析しているか？中学校における理科・社会の指導における特徴と課題についても併せて教えて欲しい。受験科目との関係・影響についても分析しているものがあれば教えて欲しい。</p> <p>②小学校の理科・社会の状況についても設問ごとの正答率の傾向を教えてください。中学校で低下する理由は小学校における課題も影響していると思う。併せて小学校の授業の課題についても教えてください。</p>	<p>①学習力サポートテストにおける中学校の理科、社会科について、設問ごとの正答率は把握しております。理科では「電流」「化学変化」「植物」についての知識に関する問題、社会科では「歴史」についての知識に関する問題が、特に正答率が低くなっております。共通して知識の習得に課題が見られることから、実験や資料から得られる情報をもとに、根拠をもって考察したり説明したりする学習を行い、知識の定着を図る必要があります。理科の実験や社会科の資料活用を通じた指導は多く行っているものの、活動が中心となり、考察や説明する学習が十分でないところが課題です。しっかりと知識を習得させるためにも、授業における「まとめ」「振り返り」を丁寧に実施するよう改善が必要と考えております。また、受験科目との関係や影響については分析しておりません。</p> <p>②小学校の理科、社会科ともに、知識に関する問題の正答率は高いですが、説明するなど表現に関する問題の正答率は低い傾向があります。小学校では繰り返し学習したり、既習を確認する学習をしたりするなど、知識の習得を図る指導を多く行っております。一方、自分の考えを表現する力を、発達段階に応じて育成するための授業が十分とは言えない課題があります。</p> <p>本区では、学校ごとの「学力向上プラン」の作成による授業改善、中学校での理科・社会科の放課後補習などに取り組んでいます。</p>
6	<p>読書に費やす時間が減っている一方、スマートフォンを使用する時間は学年が上がるにつれ増えている。読書とスマートフォンの関係、またそれらと学力、学習態度との関係を示すデータはあるか。またその分析はしているか。さらには、家庭における読書やスマートフォンを使用することに関しての考え方など読書量、時間、スマートフォン利用に影響を及ぼす要因の分析はしているか。</p>	<p>現代では、スマートフォン等のモバイル端末が普及したことにより、インターネットやライン等のSNS、ゲーム等が子ども達にとってより身近になっています。スマートフォン等は、子ども達にとって興味関心がひかれるものではありませんので、読書時間の減少と少なからず関連性はあると思いますが、スマートフォンの使用との関連性は直接的には立証されていません。</p> <p>また、スマートフォンの使用と学力との関係についてはまだ科学的に確証を得るには至っていませんが、仙台市の「標準学力検査、仙台市生活・学習状況調査の分析結果と改善方策について」の平成30年度の結果では、スマートフォンの使用時間と学力には関係性がみられるという興味深い結果が出ています。(東北大学との共同調査)</p> <p>本区では、今後の動向に注視するとともに、スマートフォンを使う上でのルールづくりの徹底等、学校における指導のほか保護者との連携強化に努めていきます。</p>

●質問

	内容	事務局回答
7	不登校から復帰できた子どもの割合、復帰できた要因等についてのデータ、情報はるか。また、その分析はしているか。	国の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」において、各学校からの申告に基づき、復帰できた割合を把握しています。平成30年度の復帰率は、小学校で73.9%、中学校で42.6%です。また、復帰できた要因は不登校児童・生徒一人一人に複数の背景があることから不明ですが、教員等の積極的なアプローチ、保護者との連携、適応教室「わくわく21」の利用などが考えられます。
8	区として学級崩壊の現状をどのように把握しているか。(定義等)また、その分析はしているか。	学校からの相談及び指導主事の訪問により、学級の状態等を把握します。学級崩壊はマスコミが作成した造語であり、定義としては存在していませんが、学級がうまく機能していない状態として捉え、その背景を丁寧に分析することにより、課題解決への対応に努めています。
9	①教員の資質・指導力に関する分析はしているか。現場でみている限り、教員によって資質や指導力にかなりの開きがあると認識している。 ②教員の離職・休職の状況を教えて欲しい。中央区に固有の課題はあるか。	①教員の職層、経験年数に応じて備えるべき資質・能力があり、それらを数値化して分析することはできません。学校では、経験年数もバラバラであり、職層に応じた役割もあり、教員一人一人の適性があります。それらをどのように組織していくかが重要となります。職層や経験年数に応じた研修を充実させ、求められる資質・能力の向上を図っているところです。 ②教員の離職者(普通退職に限る)は、この3年間では毎年全体の2~3%です。また病気休職者は、この3年間では毎年全体の1~2%であり、精神疾患を理由とするものがほとんどです。他区の状況等が分からないため比較はできませんが、区固有の課題があると考えていません。
10	区立幼稚園から入学した子どもと、それ以外(保育園、こども園)との子どもでは、小学校に入学してからの子どもたちの適応状況はどうか。また、その分析はしているか。	区立幼稚園のほとんどが小学校と併設であり、日頃から交流活動をしたり、児童の様子を見聞きしたりすることができます。そのため、比較的、幼稚園児は就学への期待や見通しがもちやすいと考えます。 入学後の適応状況については、小学校教育と幼児教育(幼稚園・保育所・こども園等)との指導形態の違い、また、様々な就学前施設から就学することによる新しい友達関係の構築のために一定の時間を要します。その段差を低くするために、各小学校が実態に応じたスタートカリキュラムを作成し、スムーズに適応できるように工夫しながら指導をしています。

●質問

	内容	事務局回答
11	<p>現行計画(改訂中央区教育振興基本計画)で、後期5年間に重点的に取り組む施策としていた87の主要事業の実績や効果に対する自己評価、および第三者評価はどのような結果になっているか。</p>	<p>87事業のうち85事業は既に実施・達成済みであり、教育目標の実現、重点施策の推進に着実に成果を挙げています。</p> <p>未達成事業のうち、「幼稚園における預かり保育の拡充」については、ニーズ等も考慮しながら引き続き検討していきます。「本の森ちゅうおうの整備」については、これまで工期を延期していましたが、今年度より着手し、令和4年度に竣工予定です。</p> <p>個別事業については、毎年度「教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価の結果に関する報告書」において、事業の進捗状況等をとりまとめ、成果・課題を分析し、有識者からの意見及び評価も活用しながら見直しを行っています。</p>
12	<p>2016年度以降に設置が可能となった、義務教育校(小中一貫校)について設置を検討したことはあるか。あればその検討結果の内容を教えてください。なければ、今後の検討の必要性について区の考えを教えてください。</p>	<p>義務教育学校(小中一貫校)の設置については、小・中学校の校数や規模の違い、中学校自由選択制、区立中学校への進学状況など区特有の環境もあり難しいと考えています。</p> <p>「中1ギャップ」への対応、小学校から中学校への学習の円滑な接続は重要と考えており、引き続き小学校と中学校の連携教育を強化していきます。現在、小学生が中学生の授業や部活を体験したり、教員間が合同研修などで交流したりするなどの取組を行っています。</p>
13	<p>近年の区立小学校からの進学先の割合は。(区立中、私立中、国公立中など)</p>	<p>卒業児童の進学先 (公立学校統計調査より引用)</p> <p>H30: 区立中学校50.9% 都立1.8% 都内私立36.6% 国立1.2% その他 9.5%</p> <p>H29: 区立中学校49.4% 都立1.8% 都内私立38.7% 国立1.0% その他 9.1%</p> <p>H28: 区立中学校48.7% 都立1.3% 都内私立37.2% 国立0.9% その他11.9%</p>

●意見

	内容	事務局回答
1	<p>1-(1)確かな学力の定着・向上 における主な取組</p> <p>①理科、社会の対策・・・「区費講師の中学校への一層の充実」 ②学習の習慣化・・・年間を通した小・中学校の「放課後補習教室の実施」 (現在、小学校で実施しているアフタースクールの拡充や講師の雇用)</p>	-
	<p>3-(2)学校における体育・スポーツ活動の充実 における主な取組</p> <p>専門家によるスポーツ教室の実施(かけっこ、投げ方、水泳、体操(マット、跳び箱)など)</p>	-

不登校の要因(平成29年度)

(単位:人)

区分	分類	分類別児童生徒数	学校に係る状況							家庭に係る状況	左記に該当なし	
			いじめ	いじめを除く友人関係をめぐる問題	教職員との関係をめぐる問題	学業の不振	進路に係る不安	クラブ活動、部活動等への不適応	学校のきまり等をめぐる問題			入学、転編入学、進級時の不適応
小学校	「学校における人間関係」に課題を抱えている。	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	「あそび・非行」の傾向がある。	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	「無気力」の傾向がある。	4	0	1	0	0	0	0	0	1	1	
	「不安」の傾向がある。	17	0	5	0	0	0	0	0	2	5	8
	「その他」	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	計	27	0	7	0	0	0	0	0	2	6	14
中学校	「学校における人間関係」に課題を抱えている。	8	0	6	1	1	0	0	0	0	0	0
	「あそび・非行」の傾向がある。	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	「無気力」の傾向がある。	10	0	1	0	4	1	0	0	0	3	4
	「不安」の傾向がある。	22	0	3	0	0	0	2	0	1	1	15
	「その他」	9	0	3	0	0	0	0	0	0	4	2
	計	49	0	13	1	5	1	2	0	1	8	21

※「不登校の要因」については、当該児童・生徒の不登校の要因として主たるもの一つを選択して分類している。区分については、考えられるものを全て選択している。

不登校の要因(平成30年度)

(単位:人)

区分	分類	分類別児童生徒数	学校に係る状況							家庭に係る状況	左記に該当なし	
			いじめ	いじめを除く友人関係をめぐる問題	教職員との関係をめぐる問題	学業の不振	進路に係る不安	クラブ活動、部活動等への不適応	学校のきまり等をめぐる問題			入学、転編入学、進級時の不適応
小学校	「学校における人間関係」に課題を抱えている。	3	1	3	0	1	0	0	1	0	1	0
	「あそび・非行」の傾向がある。	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	「無気力」の傾向がある。	3	0	1	1	0	0	0	0	0	2	0
	「不安」の傾向がある。	16	0	5	1	1	1	0	1	4	4	3
	「その他」	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	計	23	1	9	2	2	1	0	2	4	7	4
中学校	「学校における人間関係」に課題を抱えている。	9	0	8	0	0	0	0	0	2	0	0
	「あそび・非行」の傾向がある。	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	「無気力」の傾向がある。	16	0	1	0	3	0	0	0	2	8	4
	「不安」の傾向がある。	24	0	5	0	5	4	0	1	3	6	5
	「その他」	12	0	0	2	0	0	0	1	3	3	5
	計	61	0	14	2	8	4	0	2	10	17	14

※「不登校の要因」については、当該児童・生徒の不登校の要因として主たるもの一つを選択して分類している。区分については、考えられるものを全て選択している。